

## 巻頭言 「気楽なソーピー」

宇野 元

『ギレアド』の味わいある端役に、ソーピーがいます。ぼっちやりしていて、ながいしっぽの、長命の猫です。

ある日、エイムズが窓から下を見ると、シャボン玉を吹きかけられて、我を忘れて飛び跳ねている姿があります。あるときは太陽の下、まるで道に張り付いたように横になっています。部屋の中で、エイムズの膝の上に乗っていたかと思うと、いつの間にか、床の目が当たっている所で横になっています。しょっちゅう、ふっといなくなります。捕まえられると、しっぽを動かしながら、仏頂面をしています。地面におろしてやると、また好きなところへ消えてしまいます。食卓からソーセージを分けてもらおうと、そろりと動いて、どこか秘密の場所へ持ってゆきます。あるときは、子どもたちのあとをついてゆきます。しかし用心深く、距離を取りながら。おなじ方向に自分の用事ができたかのように。そんなソーピーを、エイムズは愛情をこめて語ります。「気楽なやつだよ。」

ソーピーの自由さ。胸を張ってわが道を行くふう。憂いのないあり方にあこがれを感じます。

自分らしくありたいと願う。けれども、それが難しい。「なぜ、それがこんなに難しいのだろう？」(ヘッセ)。

エドゥアルト・トゥルナイゼン牧師は、若い日の導き手から贈られた言葉を大切にしていました。その人はクリストフ・ブルームハルトでした。青年の話に親しく耳を傾けてから、ブルームハルトはこう助言しました。君らしくありなさい！ この単純な言葉を、トゥルナイゼンは、試行錯誤している自分への信頼の言葉、自分の道を自分で考え、見いだすよう、激励する言葉として心に納めました。ブルームハルトはまた、過去を振りかえり、何に関心を寄せてきたかを考えさせてくれました。君の先の道も、きっとそれと関係するだろうと示唆しつつ。自分らしくある——トゥルナイゼンにとってそれは、自分自身に対して律法学者のように振る舞うのをやめ、神の憐みの器として立つことであり、自分の貧しさをおそれず、勇気をもって進むことでした。私たちはイエス・キリストの言葉と共に、新しい週へ出発します。平安のうちに行きなさい！